第 5 章

学びを支える仲間づくり

第１節　ゼミ・勉強会・学科行事など

「広島文教女子大学初等教育学科の特色は何ですか。」と聞かれれば，迷わず「それは，ヒューマンネットワークです。」と答える。本学科の学生は，自主学習，ゼミ，サークル，ボランティアなどさまざまな活動に積極的に取り組んでいる。それらの活動を通して多くの人と出会い，そのつながりを強固なものにしながら網の目のように広げていくことで，学生一人ひとりが在学中にかなりの人的ネットワークを構築している。さらに，このネットワークの構築は卒業後も継続，発展されており，教育現場からも「広島文教女子大学出身の先生は人間関係づくりがうまく，職場で組織的に活動することができる。また，子どもや保護者からも信頼されている。」との評価を聞くことが多い。

以下，本学学生の姿を具体的に紹介しながら，ヒューマンネットワークの意義，ヒューマンネットワークづくりの理論，ヒューマンネットワークの実践事例の順で述べる。

1. ヒューマンネットワークの意義

「ヒューマンネットワーク」には二つの意味がある。一つは「人間のつながり」であり，もう一つは「人間的なつながり」である。「IT ネットワーク」全盛の現代社会において，本学科はあえて「ヒューマンネットワーク」にこだわり続けている。それは，本学建学の精神である「育心育人」の教育を達成するた

めに，「人も心も人とのかかわりの中で育つ」という強い信念に基づいているからである。

(1) 人間のつながり

A　卒業生からのメール

「先生，今年○○県を受ける後輩がいれば，私のところでよければ紹介してあげてくださいね。住所は△△です。ではまた。」

B　指導主事からのメール

・「初任者研修でＮ先生（本学卒業生）の指導をしました。なかなかしっかりとした人でした。」

・「貴学の○○小で実習中の学生，気持ちのよい挨拶，はきはきした態度，すばらしいですね。」

C　県人会の機関誌（「ふくふく４，５月合併号」山口県人会　2003.5.）

早いもので，大学を卒業して一ヶ月経ちました。春の陽気に包まれながら，可部での４年間がまるでウソだったかのような気持ちにふとなります。私の町，長門市では春からケーブルテレビが始まり，それに乗じてインターネットもできるようになりました。我が家ではさっそくインターネットも導入し，『ふくふく４，５月合併号』を，遅くなってしまいましたが，なんとか仕上げることができました。これを機会に，また山口県人の交流が縦にも横にも広がればよいなと思っています。（後略）

Ａは関東地方の某県で教員をしている25期生から今年度教員採用試験前に届いたメールである。受験のため三度上京しなければならない後輩の経済的負担を軽減するために，宿所を提供するという申し出である。この動きは，20期生が21期生を宿泊させ，試験前日に勤務校で模擬授業や実技に対するアドバイスを行ったことから始まった。最初は知り合いの先輩・後輩の間で行われていたが，そのうち「文教の後輩なら誰でも」ということになった。前述の25期生も受験時に初対面の22期生の家に宿泊し，その先輩を「めざす教師」のモデルと考え，現在，同じ県の同じ管内で勤務している。

Ｂは数年前に教育実習報告会の講演を依頼した某教育委員会指導主事からの

二通のメールである。この先生は，実習報告会での学生の真剣な取り組みに感動され，その後，本学卒業の教員や教育実習生などを気にかけ，時々メールで報告をくださるようになった。

Cは山口県人会が担当者持ち回りで発行してきた機関誌の冒頭部分である。残念ながら，この機関誌は2006年２月号以降休止状態のようであるが，復活することを期待している。また，機関誌の発行まではいかなくても，現在，多くの県人会が存在し，新入生歓迎や情報交換などの活動を行っている。

その他，学生から本学科の話を聞いて入学してくる妹や高校の後輩，本学卒業生の勤務校で臨時採用されたことが縁で教採自主ゼミに参加された他大学の卒業生，同じく同僚の本学卒業生の勧めで教員免許状更新講習に参加された先生方など，学生たちを仲立ちとしてヒューマンネットワークは着実に拡大し続けている。

(2) 人間的なつながり

A　事務職員への手紙

Aさんへ

私は，○○課で，Aさん，Bさん，Cさん，Dさんにいつも見守られ，励まされ，最後まで走り抜けることができました。

体調を気にしてくださったり，笑顔で声をかけてくださったり，書類の書き方を丁寧にご指導くださったり，悩みや不安には親身になって耳を傾けてくださったり・・・

みなさんがくださる優しさに，私は何度も力をいただきました。

特にAさんには，「頑張ってるねー！」とか，「またおいでね。」とか，たくさん気にかけていただきました。

Aさんが○○課にいらっしゃると安心します。心のオアシスですよ!!（笑）

教採合格発表のとき，「Aさんに早く報告に行きたい!!」って真っ先に思ったんですよ。

報告した日，涙目になって私の合格を喜んでくださったこと，私はあのとき，とても自分が幸せ者だと感じました。Aさんは，自分をいつも応援してくださっていた。私が試行錯誤しながらもがいていた日々を，そっと見守っていてくだ

さった。日々実感していた，Aさんのあたたかさへの感謝の思いが，あの日は一層強まりました。自分が，どれだけの愛情で包まれていたのか，そのことを，心から自覚しました。

Aさん，大好きです!!まだまだ未熟な私です。これからも，よろしくお願いします。日々成長していく気持ちを持って，笑顔を忘れず，何事にも取り組みます!!

文教に入学して，Aさんに出会えて，本当に良かったです。

長文を読んでくださって，ありがとうございました。2009.12.1（学生：N）

B　中途退学者からのメール

先生，今日は突然おじゃましてビックリさせてしまいましたね。先生の顔を見たら辞めた時の事と今日までの事と，いろんな気持ちがこみ上げてきて涙が出ました。（中略）改めて，文教に行けたことが嬉しいです。ホント心からの友だちに出逢えて，チューターに出逢えて，良かったです。

C　オープンキャンパスでの話

高校生を対象とするオープンキャンパスで，3年生が大学生活について説明をした。その際，高校生から「どうして文教を選んだのですか。」という質問が出た。これに対して，その学生は「私は，最後まで地元の国立大学をめざしてセンター試験を受けていた。だから，受験するまで文教の名前すら知らず，高校の先生の勧めで入学した。でも，今はここへ来て本当に良かったと思っている。ただ，自分が第一志望ではなかったので，みなさんにどうしても文教へ来てくれとは言えない。自分の希望の大学めざしてがんばってほしいし，どこの大学に入学しても，良い先生になるために頑張ってもらいたい。でも，もしだめだったら，文教を選んで後悔することはないと思う。入学してくれればすごくうれしいし，一緒に夢を実現したいと思う。」と答えた。

D　教員採用試験受験会場での話

・某県の受験を通じて友だちになった地元の国立大学生は，先輩からの受験情報などがなく，二次試験の内容を全く知らなかった。昼食時にそのことを知り，試験30分前にロールプレイングがあることや昨年までの方法などを教えて，すごく感謝された。

・一緒に受験した高校の同級生から，「地元の国立大学では，みんながライバ

ルなので自分の得た情報は絶対に教えない。」と聞いた。文教の教採自主ゼミについて話すと，「N大学は雰囲気がぎすぎすしているので，文教がうらやましい。そういう人たちにこそ教員になってもらいたい。」と言われた。

Aは教員採用試験に合格した学生が事務職員に宛てた手紙である。わずかな機会をとらえて学生を支えようとする職員とそれに感謝する学生との心の交流が文面に溢れている。その他，２年次の観察実習校や宿所の管理人に進路決定の報告とお礼に行った学生もいる。

Bのメールの送信者は，事情により大学２年で本学を中途退学した者である。２年前に卒業した同学年の学生と一緒に４年ぶりに大学を訪れた。聞けば，今年度で定年退職される先生の誕生日に合わせて福岡から来たという。学生同士のつながり，教員と学生との絆に感動した。

Cの説明会終了後，学生が，「オープンキャンパスであんなことを言って，まずかったですかね。」と聞いたので，「他大学には真似できない文教らしさではないかな。」と言った。出会った人間すべてに誠実であろうとする姿にすがすがしさを感じた。

Dの学生は結果的には両県とも不合格であった。ひょっとすると，試験内容を教えた受験生が合格したかもしれない。だから，自分が合格するためにはライバルに情報を教えない方がよいと考える人もいるだろう。しかし，この話を聞いた初等教育学科の学生たちは，「目先の合否にこだわるよりも，みんなから先生になってもらいたいと思われるような人間になることが大切である。教採合格はあくまでもスタートであって，ゴールではない。『良い教師であり続ける』ために，私たちはずっと努力し続けなければならない。」と言った。

以上の例に見られる人間的な優しさと逞しさこそ初等教育学科気質なのである。そして，そういう気質は多くの人と出会い，学び取ることによって自然に身に付いてくるのである。

2. ヒューマンネットワークづくりの理論

(1) 個を生かす学習集団

なぜ初等教育学科の学生は広がりと深まりのあるヒューマンネットワークを

構築することができるのであろうか。それは，初等教育学科が伝統的に「個を生かす学習集団づくり」に取り組み，学生がその集団づくりのノウハウと1プラス1が3にも4にもなるという集団の素晴らしさを体験的に学んでいるからだと考える。

「個を生かす学習集団」を「オーケストラのような集団」と表現する人がいる。一人ひとりの学生には，楽器の音色が異なるように，それぞれの個性（持ち味）がある。集団に合わせるために個性を押さえるのではなく，個性を引き出し，調和させることによって個も集団も成長させようという考え方である。その際，指揮者としての教員の役割は，自分では音を出さず，学生の個性が輝くように徹底的に支援することである。

(2) 個を生かす学習集団づくりの手立て

「個を生かす学習集団」は，およそ次の三つの段階を踏むことによって育成される。

①よりどころづくり（認め合う集団）

何かが気になって勉強が手に付かないという経験はないだろうか。悩みや不安があると今なすべきことに集中することができない。そこで，まず最初に行うのが「(心の）よりどころづくり」である。「この仲間といると楽しい，この集団の中では安心できる」という心のよりどころとなる集団を準拠集団と呼ぶ。準拠集団ではお互いを認め合うことができるが，そのためにはお互いによく知り合うことが必要である。

例えば，本学科では，研究室のドアを可能な限り開けておくようにしている。学生が入りやすくするためである。また，講義・演習において発言の機会を増やしたり学生の書いたものを紹介したりする。さらに，ゼミ，教育実習や卒論発表などを中心に学年間の交流をはかっている。こうして，学生と教員，学生同士のコミュニケーションを密にすることで，心のよりどころとなる集団を育てる。尚，この段階では教員はさまざまな方法で集団に働きかけ，問題が発生すれば積極的に集団に提起していく。

学年のよりどころづくりの実際を二つ紹介しよう。

一つ目は，Tシャツづくりである。大学全体のスポーツデーや大学祭などの時に，学年やゼミなどでおそろいのTシャツを作っている。例えば，24期生の

背中には「みんなと逢えた　そんな奇跡みたいなことが　本当に嬉しいから　みんなと出会えた幸せ　今，伝えるよ　ありがとう大好きだよ」と書かれていた。

二つめは学年のシンボルである。それは，２年次の野外活動で生まれることもあれば，大学生活充実期に入る３年生の秋に決定されることもある。いずれにせよ，学生たちは，苦しいときに学年のシンボルを合い言葉とし，確認することで，お互いに支え合っている。最近の学年のシンボルは次の通りである。

22期生「運命座」

野外活動でオリジナル星座をつくった時，「この仲間が全国から文教へ集まったのは，偶然ではなく必然である。」という名言とともに生まれた。

23期生「ひまわり」

野外活動で「自分たちの学年を花に例えると何か。」という質問に対して，圧倒的多数が一致したため生まれた。卒業まで「初教23期生　Sunflower　上を向いて成長中」と書かれたひまわりの絵が学年掲示板に貼られていた。

24期生「オレンジのたんぽぽ」

教育実習報告会で，全員が集まって一つの花を形成し，卒業後は綿毛となって各地に根を下ろし，オレンジで表される愛情を振りまくという意味でつくられた。その後，卒業論文要旨集などさまざまなところにたんぽぽのデザインが使われた。

25期生「太陽」

教育実習報告会冊子の裏表紙に次のようなオリジナルの詩と絵が掲載された。

たいよう

あったかなあったかな太陽を　　めざしてのびる花のように
大きな大きな夢に向かって　　花を咲かせる自分でいたい
あついあつい太陽に　頭をたれた花があるなら
手のひらあふれる水を運ぼう
あの日　あなたが私にくれた　　やさしさあふれる笑顔のように
そして　いつか届けたい　　いまから出会う　まだ見ぬ君へ
光り輝く　太陽のように　　みんなで笑う幸せを

26輝星「星（一人一人が輝けば皆がもっと輝く）」

自分たちの学年を輝く星と名付け，25期生と同様に教育実習報告会冊子に詩と絵を掲載した。

ほし

夜空に広がる満天の星　　明るいときには見えないけれど

私は知っているよ　　あなたががんばっていることを

そして　そのがんばりが光となって　きらきら輝くんだ

一つひとつは小さな光でも　　みんなが集まれば大きな輝きとなる

もしも　あなたが道に迷ったら　　私はあなたを照らす光になろう

そして　一緒に歩いていこう　　きらきら輝く明日へ

以上のように，先輩の取り組みを参考にしながら，自分たちの学年が心のよりどころになるよう努力している。27期生は実習報告会で「27樹生　かちぐりだるま」というシンボルをつくった。これが学年共通のシンボルとなり，心の支えとなることを願っている。

②しくみづくり（支え合う集団）

次に行うのが「しくみづくり」である。「よりどころづくり」だけでは楽しく生活することはできるが，目標を達成する力が弱い。個も集団も成長するためには，一人ひとりが分担された役割を果たしながら協力して活動することが重要である。いわゆる「一人一役」の役割を果たすことによって，自分は集団の中で役立っているという自負心が生まれる。しかし，一人ひとりが責任を持って役割を果たすということは容易なことではない。全員がやり遂げられるよう，支え合い，励まし合う必要がある。そして，別の場面で役割を交替することによって，集団の力を借りながら一人ひとりに確かな力がつくのである。

例えば，本学科ではオリエンテーションセミナー，初教スポーツデー，野外活動指導法，教育実習，卒業論文発表会，学科卒業式などさまざまな行事に取り組んでいる。その多くに実行委員会制を取り入れ，ある行事のリーダーが別の行事のフォロアーにまわるという形で全員がリーダーになれるように配慮している。なお，この段階では教員は「よりどころづくり」の場面よりは少し押さえて行動し，教員側から働きかけながらもできるだけ学生の主体的な動きを

引き出すよう配慮している。

その結果，入学時には考えられないほど積極的に活動する学生も出てくる。24期生のある保護者からは，「高校時代には全く人前に出られなかった娘が，役員に立候補して活躍している姿を見ると，信じられない思いがする。そのように育ててもらった初等教育学科に感謝するとともに，今後も今の教育を続けてほしいと願っている」という内容の長文の礼状が卒業前に寄せられた。

③ねうちづくり（学び合い，高め合う集団）

三つの段階の最後に行うのが「ねうちづくり」である。この段階になると，「よりどころづくり」で集団に所属していることに喜びを感じ，「しくみづくり」で集団での活動方法を身につけたことによって，学生が自分たちで目標を設定し，独自の発想や工夫を生かしながら活動する。その過程で切磋琢磨しながら自分を高めていく。他人には思いやりをもちながら自分や集団の目標の達成に関しては厳しい評価するというのが特徴である。尚，かなり自立した集団であるため，教員は学生の主体性を重んじ，学生の要望を待ってそれに応じた支援をすることになる。

次に紹介するのは，教員採用試験終了後に学生から教員へ宛てた手紙である。

先生方へ

教員採用試験を終えて

教員採用試験を通していろいろなことを考えさせられたように思います。三つの自治体を受け，様々な内容の試験に出合い，文教のすばらしさを実感しました。他大学を批判しても仕方ないですが，他の受験生の模擬授業や，面接での受け答えに違和感を覚えることもありました。一緒に学んでいる仲間の偉大さにも気付きました。また，面接を通して，自分自身を振り返ることができたり，新たな発見もあったりしました。教員採用試験を受けることができて本当によかったと思います。

お盆にもかかわらず，学校に来てくださったり，一次試験に合格したということを報告すると，本当に喜んでくださったりする先生方に対して，感謝の気持ちを持っていました。しかし，よく考えると，教員採用試験を通してではなくて，今までの４年間全てで，私たちを育ててくださったのだと実感していま

す。講義の内容や，普段のかかわりなど，すべてが教育だとよくわかりました。文教は，「大学では」，「小学校では」ということは関係なく，「教育とは」ということを４年間を通して先生方の姿勢で示してくれる大学だと思います。面接の時には「胸を張って大学を紹介できますし，自分の大学に誇りを持っています。」とも言えました。文教に来て本当によかったと思います。

教員採用試験に向けて多くの支援をしてくださった先生方に対してのお礼は，私が力を高めることだと思います。少しずつ頑張ります。本当にどうもありがとうございました。これからもよろしくお願いします。

平成21年９月５日（学生：Ｓ）

文面から，教員の意図，本学科の特色，成長した仲間のすばらしさなどを理解していることがわかる。そして，大学に誇りを持っていることと今後自分のなすべきことを自覚していることが何よりもうれしい。４年間のひたむきな努力が結実した姿だと思う。

3. ヒューマンネットワークの実践事例

初等教育学科におけるヒューマンネットワークづくりの視点から，オリエンテーションセミナー，コース・専修，教採自主ゼミ（勉強会）を取り上げて紹介する。

(1) よりどころづくりに重点を置いたオリエンテーションセミナー

次に紹介するのは，オリエンテーションセミナー（以下オリゼミ）に参加した23期生二人の感想である。その当時は，４月の入学式直後に学科別で行われていた。初等教育学科では，オリゼミ実行委員に立候補した２年生を中心に半年前から準備を始め，１泊２日のすべてのスケジュールを企画・運営していた。実行委員長を中心に全体運営を担当する係，食事を担当する係，健康管理を担当する係，親睦をはかるためのゲームを担当する係，大学施設の説明をするためのビデオ撮影を担当する係など役割分担をして，入念に準備を進めた。そのため，2日目の閉会式では感極まったオリゼミ実行委員たちが号泣し，１年生がもらい泣きするシーンがよく見られた。

オリゼミは，想像していた以上にとても楽しく，面白いものだった。友だちづくりが苦手な私でも，たくさんのレクリエーションで得られた「交流のきっかけ」を使うことで，多くの友人を作ることができた。また，オリゼミ実行委員の先輩方にもいろんなことを学んだ。私は友だちづくりが苦手なこともあって，大学では友だちができなかったとしてもやっていけるだろうと考えていた。確かにそれは間違いではないと思っている。でも，友だちをつくった方が何倍も楽しく充実した生活ができるし，得られるものや思い出も増えるのだと実感させられた。国立受験に失敗したことで，何もかも投げやりになっていたけど，「もう一度前向きに頑張ってみよう」とも思えるようになった。オリゼミ実行委員の先輩方の団結力の強さもとても印象的だった。全員が私たちのために一生懸命に頑張っているということをずっと実感していた。少しでも多くの友だちをつくってほしい，楽しんでほしい，そんな声が今にも聞こえてきそうだった。そういう先輩方の団結力や友情の深さが羨ましくてたまらなかった。私もこの初教のみんなと仲良くなりたいと心から思った。また，見えないところでの活動も印象的だった。先生が言われていたように，私たちが自由に過ごしていた時間にも先輩が話し合っている場面を私自身も見た。高校時代にクラス委員や部活動の役員をしていたので，その重要さも大変さも辛さもよく分かる。それをわかった上で実行委員になった先輩方をとても尊敬している。私も来年のオリゼミには，ぜひ実行委員となって参加したいと思った。オリゼミで得られた「もう一度前向きに頑張ってみよう」という気持ちと新しくできた多くの友だちをいつまでも大切にしたいと思う。（学生：M）

たった一歳しか違わない同じ大学生が，どうして百人以上の人を楽しませることができるのか。同じ年の大学生がどうして簡単に初対面の人に自分の意見をはっきりと主張することができるのだろうか。

私にとってこのオリゼミは「井の中の蛙大海を知らず」という言葉をしみじみと感じさせるものであった。教師になるという夢を11年間抱き続け，それが偉いと思っていた私を恥じた。小・中・高と，先生方にはいつも「先生に向いている」とか「先生になってほしい」と言われ，自信を持ち自惚れていた自分

を恥じた。（中略）

人前で話すこと，人と積極的に交わりを持とうとすることなど，教師を目指すのであれば大切なこと，それと同時に私が苦手とすることを先輩は，そして周りの友人はしっかりと身につけていた。それらの影響で，私のこれから４年間の目標が定まったように感じる。

私は今まで，ライバルとしていた友人には何があっても勝とうとし，彼らの知らないことを知ろうとし，そして彼らの持たないものを持つことで優越感を抱いていた。しかし，このオリゼミに参加し，その意識が少し変わった。文教の仲間とは，たとえライバルであっても，互いに欠けているものを互いで埋め合わせていきたいと思う。そして互いの成功を喜び合いたいと思う。

この４年間で井の中の蛙がどれほど大海で認められる人物になるか楽しみになった。（学生：Ｓ）

前者は，大学入試に失敗したことで投げやりになり，本学でのこれからの生活に意欲的になれず，集団にも期待しないという心理状態で入学している。一方，後者は，自分の力を過信し，集団のメンバーとは競合しようという意識をもって入学している。ところが，その二人がたった二日間のオリゼミで，本学科で仲間と支え合い，高め合おうという意欲と展望をもつようになった。他の学生も同様で，入学直後の段階で全員が同一歩調で前向きになるということは４年間の学びを深める上で極めて大きな意味をもっていた。

創立60年を期に，オリゼミは以前行われていたような全学科合同形式に変わり，現在は５月に行われている。初等教育学科では，少しでも早くよりどころづくりをするために，４月に小規模な学科オリゼミを企画するなど試行錯誤している。大学全体のオリゼミも含めて，オリゼミが学生に対して教育的効果を上げるためにどうすればよいか。教員と学生が共に考えるべき課題である。

(2) しくみづくりに重点を置いたコース・専修

１年生後期にコース・専修を決定し，２年生から卒業までコース・専修（以下，ゼミ）に所属して少人数での学習を行う。あるゼミでは次のように役割を分担している。

・代　表……ゼミを代表し，他のゼミや教員との連絡・調整，全体運営を行う。
・副代表……代表を補佐し，協力して全体運営を行う。
・会　計……卒業時の卒論製本代，文教教育学会会費，卒業旅行などに備えて毎月積み立てる金の管理，その他会計処理を行う。
・美　化……ゼミ室の整理整頓，清掃などの計画や指示を行う。
・連　絡……連絡網をつくり，伝達事項を全員に連絡する。
・企　画……新入生歓迎会，教育実習慰労会，卒業生を送る会などを企画・運営する。

その他，コース・専修の特性などによっても異なるが，輪番制での発表や模擬授業などを担当する。その際，先輩が後輩の指導に当たることもある。また，ゼミとして大学祭へ参加することもあるし，卒論の発表要旨集の印刷などもゼミ単位で担当する。さらに，体育専修による初教スポーツ大会，音楽専修・体育専修による教採実技チャレンジセミナーなども行われている。学生はこのような役割を責任を持って果たしている。

但し，少人数であるが故に，意見の違いを認め，お互いに指摘し合える関係をつくるまでには相当な時間と話し合いを要する。時には，人間関係に悩み，涙ながらに相談に来る学生もいる。そういう葛藤を乗り越えて，卒業する時には，「このゼミで本当によかった。」という言葉が聞かれるのである。

あるゼミの22期生が，卒業時に，これまで毎月寄せ書きしていたものをまとめて「おもひでぽろぽろ」という冊子を作っている。メンバー全員の満面の笑顔の写真と最初のページの「苦しいことも嬉しいことも自分を育てる肥やしになるさ」という墨書が印象的である。卒業論文という最後の難関を突破し，３年間のゼミを振り返ったとき，ひとまわりもふたまわりも成長した自分と仲間の姿を実感し，出てきた言葉のように思える。

(3) ねうちづくりに重点を置いた教採自主ゼミ（勉強会）

現在の教採自主ゼミ（勉強会）に直接つながる動きは20期生に始まる。2003年度の教員採用試験の現役合格者は２名であり，「どうせ現役では合格できないからとりあえず臨時採用でもして何年か後の合格をめざそう」という雰囲気

が学生の中にあった。そこで，当時3年生であった20期生の広島県教員採用試験を受験するメンバーが教採自主ゼミ（勉強会）をつくり，3年次の2月に合格した卒業生を招いて試験内容や学習方法について話を聞いた。その後，仲間と試行錯誤しながら自主学習を続け，現役合格者を出した。それから他県の自主ゼミ（勉強会）も立ち上がり，幼児教育コースにも広がり，自分たちの取り組みを次の学年に引き継ぐことで，充実した学習ができるようになった。小学校教員採用試験の現役合格者は，その後，6名，10名，15名，21名，20名，27名，21名と増加し，公立保育士・幼稚園教諭にも多数採用されるようになった。自主ゼミ（勉強会）の成果と考えている。

自主ゼミ（勉強会）は「自立した学習者相互による主体的な学び合いの場」である。まず，教員が新入生に「聞かなければ教えない」と伝えることから始まる。新入生は，先輩が勉強している部屋のドアをノックして名乗り，質問して勉強方法のアドバイスを受ける。これは，これまでの受け身の学習から脱却させることを目的としている。

こうして，個の学習に対する自主性を育てながら集団で学習する意義に気づかせる。自主ゼミ（勉強会）は，基本的にメンバーを固定せず，いわゆる「来る者は拒まず去る者は追わず」という柔軟な雰囲気を大切にする。グループは，ゼミ，受験する県単位，気の合う仲間などさまざまで，一人が複数の勉強会に所属している場合もある。目的も，教員採用試験対策に限ったことではなく，内容や方法をメンバーで話し合って決めている。

27期生の自主ゼミ（勉強会）には，ビタミンHの会（広島県），愛媛ポンジュースの会（愛媛県），大阪 Lovers（大阪府），フォーゲル mahn（島根県），松っ子（山口県）などがあるが，規模も内容も多様で，学生の主体的な活動に任せているので，現在いくつの勉強会が活動しているのかは把握できていない。

試験が終わると，「顔晴（がんば）り」の製作を行う。「顔晴り」とは教員採用試験報告書で，自分の取り組み，試験内容や後輩への激励などで構成されている。製作も，学生が自主的に製作委員を決めて，原稿依頼，印刷，製本などを行っている。以前は，「教採合格の秘訣」という A5 版の小冊子であったが，「教採合格の秘訣・奮闘の記録」を経て，23期生が「顔晴り」と名付け，今年度（26期生）は B5 版152ページという堂々たる冊子となった。名称の変更にも「結果よりも

過程を大切にしよう」という思いが表れており，公務員・一般企業，幼稚園・保育所，卒業生や他学科の学生も含まれるなど内容的にも充実してきている。

最後に，「顔晴りを伝える会」が開かれ，多くの下級生が参加して４年生の話を聞く。今年度は，不合格者が初めて代表の一人として話をし，参加者の心を動かした。その後，県別のブースに別れて質疑応答などがあり，夜遅くまで室内に熱気が立ちこめた。

４年生の一人が，「それでも尚，後輩のために何かできないか」と考え，まだ見ぬ来年度の「顔晴り」製作委員に宛てた手紙をつけて，自分たちがこれまでに作ってきた資料や段取りなどを教員に託した。この話を聞いた２年生は，次のように書いている。「先輩の話を聞いて，文教の先輩はすごいと思いました。動いたのがその先輩であっても，やはり周りの先輩の影響があったからだと思うので，その先輩はとても良いメンバーに恵まれていると思いました。同じ県の先輩ということで，あこがれとやる気がわいてきました。」

先輩から後輩へと脈々と受け継がれていく初等教育学科気質を目の当たりにして，嬉しく，誇らしい気持ちになった。と同時に，「教員は初等教育学科の教育方針を継承・発展させる組織的実践をしているか」と問われているようで，身の引き締まる思いがした。

（村上典章）